



第 56 号

編集・発行

信州大学附属図書館

繊維学部図書館

平成 18 年 10 月 31 日

---

CONTENTS

---

チェック、エンジン、リポジトリ	繊維学部図書館長	高須 芳雄	(2)
「しめの」と「しなの」考	機能高分子学科	太田 和親	(3)
図書館通信	告知板		(7)
	図書館日誌		(8)
編集後記			(8)

---

Library(電子版)はインターネットでも提供しています。

URLは <http://www-lib.shinshu-u.ac.jp/seni/online.html> です。

# チェック、エンジン、リポジトリ

繊維学部図書館長 高須芳雄

カタカナと本が苦手な私が、はからずも繊維学部図書館長を拝命し、本年4月からその任に就いております。私には荷が重いことを知りながら、「拒否権」を行使しなかったのですから、責任があります。

繊維学部図書館は、これまでの委員各位と関係職員の弛まぬ努力によって充実してきました。それに敬意を払いつつも、敢えて現時点の課題として、次の4点の充実を挙げさせていただきます。

学生用参考図書類

専門学術情報

信州大学機関リポジトリ

繊維学部として特徴のある蔵書

学生用参考図書類はかなり豊富ですが、まだまだ満足できる水準ではありません。必須の参考図書や新刊図書類の体系的な“チェック”と、それを保証する学科の枠をこえた検討が必要です。教員にあっても、学生諸君が図書館を利用したくなるような授業を展開することも必要でしょう。

近年の書籍高騰の煽りを受けて、専門学術雑誌の購入数は、数度にわたって削減を余儀なくされてきました。そのかわりに、SciFinder、Scopus、Web of Science など、文献検索用の“エンジン”が整備されましたが、電子ジャーナルはまだ不十分です。図書委員会としては、全学が整備すべき電子ジャーナルの整備だけでなく、学部連携、学科・研究室連携による購入の幅広い模索など、なすべきことは多くあります。

今年の4月から話題になっている信州大学機関リポジトリの構築は、本学の重要課題の一つです。学内には、「天から降ってきた」「リポジトリ」という聞き慣れない名称に対する疎外感と、「何のために？」といった戸惑いが見られます。無批判に受け入れることを潔しとすべきではない大学にとって、至極当然な反応です。とは言え、既に「教育者研究者総覧」の再構築作業が始まっており、図書委員会では、機関リポジトリが提供する内容を、「走りながら考え」なければなりません。国立情報学研究所の肝煎りで全国の多くの大学が機関リポジトリを構築することになっただけに、各大学の学術活動の水準がより明確になる時代になるのは確実です。大学の学術情報を体系立てて発信する機関リポジトリの構築には、世界的な学術情報の流れの理解とともに、学部・学科固有の研究分野に対する配慮が不可欠です。是非とも意味あるものにしたいものです。

最後に掲げた課題は繊維に関する蔵書の計画的充実であります。今までもそうであったように、これからも本学部の責務であり、信州大学の誇りでもあります。

図書館は最高学府の知識の宝庫、学生と教職員が情報を入手し発信する「館」です。今後とも一層のご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

# 「しめの」と「しなの」考

信州上田市在住 太田和親

2005.3.22 卒業式までの時間に書留

2005.3.29-31 加筆修正

## 【第1章】1989年に考えたこと

私は1989年に李寧熙(りよんひ:1931年生)著「もう一つの万葉集」と言う本を読んで「しめの」と「しなの」が同じ意味ではないかと考えるに至った。

万葉集 巻一の二十にある有名な額田王(ぬかたのおおきみ)の歌は、万葉仮名による表記は次のようになっている。

茜草指 武良前野逝、  
標野行 野守者不見哉 君之袖布流

この歌に対する【従来の訓読】は、

あかねさす 紫野(むらさきの)行き  
標野(しめの)行き 野守は見ずや 君が袖振る

となり、【従来の解釈】は、

<あかねさす>紫野を行き  
標野(しめの)を行って野守は見ているのではありませんか  
貴方が袖を振るのを

とされている。

しかし、李寧熙(りよんひ:1931年生)著「もう一つの万葉集」、文藝春秋社、1989によると、この万葉仮名を【韓国語読み】すると、

ゴッドシオンサチ パラセッポルガネ  
ピョマルガネ ポルジキシャ アニポジェグデガサポルヨ

となり、その【真の意味】は

あかい股(さし:臀<しり>)が紫色の野原(蕃登<ほと>)  
を行います。

標野(しめの:禁野)を行くのです。野守は見えてないでしょうね。

貴方が私のはさみ<両股>を広げているのを

となり、誠にリアルな性描写となる。つまりこの歌は日本語と韓国語の二重歌となっているという。額田王は両方の言語を自由に操れる人で、日本語の意味を表に、韓国語の意味を裏に、示し両意に取れる歌を作ったのではないかということだった。李寧熙さんは日本生まれで、小さい頃に韓国に両親とともに帰り、この本を書いた当時は韓国の女子大の文学部の教授であった。完全なバイリンガルだからこそこのことに気がついたようだ。額田王の頃は日本は極めて国際的で、宮廷の多くの人々は多言語を使用していた。また多くの帰化人を宮

廷は官僚として抱えてもいたのだ。だから、この二重歌も多くの人に直ぐ面白いと理解されたに違いない。李先生によると、他にも沢山万葉集には日本語と韓国語の二重歌があるそうである。この額田王の歌は、従来の訓読は間違いで、次のように読むべきだとこの本では提言されていた。

茜草(あかね)股(さし) 紫野(むらさきの) 逝(ゆ)き

標野(しめの)行き 野守は見ずや きみはさみひろげり

また、李先生は、この中で『標野(しめの)』の意味を『ピョマル』(標識)を立ててある『ポル』、つまり誰々の領地であるとか、神域であるとかを示す立札や棒ぐいなどの『しるしをしてある』野原を指す。すなわち『標野(しめの)』とは『立札などが書かれている占有地』、『立ち入り禁止と記されている禁野』である(87 ページ)。と説明している。

私は、この李先生の説明をを読んで、その時、日本語では意味不明の「しなの」は「しめの」であると、直感した。そこで、2000.12.02 から 2001.3.2 にかけて書いた随筆「むかしむかしの信州のことばとひとびと」の中で、次の様に「しなの」の意味について考察した。

### 信濃の意味

話は変わるが、信濃という意味も日本語で分かるであろうか。シナノの漢字表記は信濃のほか科野などがある。従って、いわゆる音を写した当て字である。高校の古典で更級(さらしな)日記というのを習ったことがある。信州に来ると他府県にはないシナのつく地名がやたらと多いのにびっくりさせられる。更科(さらしな)郡、埴科(はにしな)郡、立科町、蓼科高原、明科、神科などなど沢山ある。シナはアイヌ語ではなく朝鮮語系の言葉である。シナというのは朝鮮語で旗を立てて許可なく入るべからずという土地を意味しているようだ。従って、蓼の多い土地に旗を立てて、ここは我々のものと宣言したところは、蓼科。新たに土地(さらち)を領有したところは更科と命名する。また、野と原は意味が違う。富士の裾野というが裾原とは言わない。なぜか。それは、野は傾斜地の原っぱ、原は水平な地の原っぱをいうからである。従って、シナノというのは、旗を立て我々が領有宣言した傾斜地、つまり、早い話が植民地である。シナノは「植民地」という意味だというと、信州の人が怒り出すかも知れないが、次のような興味深い万葉歌が残っていることが、信州上田市にある信濃国分寺資料館内の掲示からわかる。

「信濃道(しなのじ)は今の墾道(はりみち)刈株(かりばね)に、足踏ましむな履(くつ)はけわが夫(せ)」

信州は新しく開拓したところで、道も険しく整っていないので、京から赴任する夫よ、刈り株を踏まないよう、靴を履いて無事に行って下さい、という意味である。墾(はり)については愛媛県に今治(いまばり)、茨城県に新治(にいはり)郡というのがあるが、正に新たに開拓領有して治めたこほり(郡)である。上の万葉歌を見れば、信濃が新たに開拓領有された土地であることは疑う余地がない。

信濃と名付けられる以前に住んでいた人々は、アイヌ語系の縄文人でそこへ朝鮮語系などの弥生人がやってきたのが、他の西日本よりはかなり遅かったのだろう。山が険しくてなかなか入り込めなかったものと思われる。

## [第2章] 2001年に考えたこと

その後の2001年の夏秋に瀬戸内寂聴さん訳の「源氏物語」を全巻読み通した。その中に、「しめ」について大変興味深い例があった。

### 源氏物語の絵合(えあわせ)の帖に

#### 【朱雀院】

身こそかく 標(しめ)のほかなれ  
そのみの 心のうちを 忘れしもせず  
(瀬戸内寂聴訳) 卷三・頁 236  
今は宮中の外にいて  
あなたと離れているけれど  
あの昔、貴方と愛した心のうちは  
今も決して忘れてはいないのです。

#### 【梅壺の女御の返歌】

しめのうちは 昔にあらぬ  
こちして 神代のことも 今ぞ恋しき  
(瀬戸内寂聴訳) 卷三・頁 237  
院が御在位だったあの頃と  
宮中はすっかり変わった心地です  
その宮中に住む身になって  
神にお仕えした齋宮時代が  
いっそ恋しくなる今日この頃

このように、瀬戸内さんの訳では、「しめのうち」は宮中となっている。宮中は禁中、禁裏ともいい、一般人は立ち入り禁止の占有地であるから、李先生の解釈と一致する。これらの歌の「しめのうち」や「しめのほか」の「の」は野原の「の」ではなく格助詞の「の」であることに注意したい。また、これらの歌からも容易に判るように、神社に張られた「しめなわ」は元々、立ち入り禁止を表わすための縄であったことが推理されて大変興味深い。

因に韓国からの留学生、留学生と言っても韓国では工学部の助教授の先生に、この「しめ」とか「しな」という単語について聞いてみたところ、

「ああ、今はほとんど使いませんが、「しな」という単語は大変古い言葉で、そこには入ってはいけないところ、たとえば神社の境内みたいなところをさして言う言葉です。」とのことであった。やはり、この単語は韓国語から入った言葉にまちがいない。

## [第3章] 2004年に考えたこと

その後の2004年4月18日～23:15にNHKラジオで、奈良大学文学部上野誠先生の「私の中の万葉集 第3回」という話を聞いた。そのお話の中で、額田王の例の歌を取り上げ、

「しめの」の関連用語を次のように解説された。

・しめ(標)さす＝スティック(棒)を刺す

・しめ(標)はる＝しめ(なわ)を張る{若菜摘み(＝宴会)をするため、野原は公共のものだが、「しめはり」して「しめの」(＝立ち入り禁止の占有地)にする}

という内容のお話がとても印象に残った。上述の「2001年に考えたこと」とぴったり合う。

## [第4章] 2005年に考えたこと

### (4-1)

以上のことから、「しめの」と「しなの」が同じ意味であるという私の考えは、間違いないように思う。しかし、皆さんには「しめ」と「しな」がなぜ同じ意味になるのかまだ疑問が残るであろう。

この変化は母音調和という文法が、当時あったためではないかと私は考えている。上述の「しめさす sime-sasu」も「しめはる sime-haru」も、二つの単語を一緒にして一つの複合単語になったときは、第1語の語尾母音 e と第2語の語頭母音 a というように、異なる母音になっている。「しめ sime」はもともと単独で使われるとき「しな sina」だったと考えられるが、「しな+さす sina+sasu」も「しなはる sina+haru」も一つの複合単語をとるときには、第1語の語尾母音 a と第2語の語頭母音 a が同じ母音になることはさげられ、第1語の語尾母音 a が母音調和をして e へ変化して「しめさす sime-sasu」と「しめはる sime-haru」となる文法があったのではないかと考えられる。そのとき子音 n が m へ同時に変化する文法も昔あったのだろう。こうすると二つの単語ではもはやなく、一つの複合単語となっていることを明示できて、話者と聞き手の間の混乱が避けられて都合が良かったものと考えられる。今もその名残がある単語として、「みなくち」がある。二つの単語の「みず midu」と「くち kuchi」が一つの複合単語になったとき、midu-kuchi のような第1語の語尾母音 u と第2語の語頭母音 u が同じ母音になることはさげられ、第1語の語尾母音 u が母音調和をして a へ変化して、mina-kuchi となるものと、同様に考えられる。このとき子音 d が n へ同時に変化している。これも昔、複合語を作るときの文法上の規則があったからなのだろう。

こうなると、従来の万葉仮名表記の標野を「しめの」と訓読する習わしは、後世の人の間違いではないかと思う。万葉集を本居宣長が江戸時代に読み解いたときに、もう昔の細かい文法までは判らなくなっていて、万葉仮名で書かれると、母音調和のような現象までは再現できなかつたのであろう。したがって、額田王の時代、標野と書いて「しなの」と読むのが本当は正しかったのではないかと思う。このことは、今も「水口」や「水底」と書かれてこれらの場合だけ「みなくち」や「みなそこ」と読むのは細かい音韻変化の習慣や文法を知っていないと正しい発音を再現できないのと同じであると考えられる。

私は言語学は趣味で専門ではないので、この仮説が正しいと自信を持って主張できるものではないが、しなの(信濃)の語源を考えるうえで額田王の歌の中に出て来る「標野」が大きなヒントになったことは、大変面白いと感じている。今後、識者の本格的な言語学的研究を期待するものである。

(4-2)

2005年3月9日の日経新聞朝刊に、奈良県明日香村の飛鳥京跡を発掘調査していて、天武天皇らが在所とした後飛鳥岡本宮・飛鳥浄御原(きよみがはら)宮(656-694)の正殿跡の全容が判明したと、報じられた。その特徴は、正面中央に入り口がなく、東西に左右非対称で特異な構造をしていたことが判った。古代の宮殿は中国の影響から左右対称が原則とされていたので、極めて異例である。また、正殿四隅には旗竿を立てたと見られる跡があり、橿原考古学研究所は「荘厳さを演出した」と話しているという。

この記事を読んで、私は橿原考古学研究所の「四隅の旗竿」に関する見解は間違っていると思った。上述の考察から明らかなように、「四隅の旗竿」はここが「しめの」であることを示し、立ち入り禁止の場所＝禁裏であることを示す意味である。これは、日本古来の伝統を引き継ぐ建築様式だったからこそ、この「四隅の旗竿」が立てられていたのだと思う。

# 告知板

ここでは図書館からの最新の情報をお知らせしています。  
次号発行までのお知らせは、繊維学部図書館ホームページ  
(<http://www-lib.shinshu-u.ac.jp/seni/>) をご覧ください。

## ⇒ 平成 18 年度 係員職務分担

平成 18 年度における係員の職務分担は次のとおりです。

担当者	内線	e-mail アドレス	職務分担
主査 内海 広	5313	utsumih@shinshu-u.ac.jp	繊維学部図書館事務総括
伊藤葉子	5015	jja0152@shinshu-u.ac.jp	雑誌(購入・製本)／目録(雑誌) 別刷
寺澤真由美	5016	mayumi@shinshu-u.ac.jp	文献複写／現物貸借 情報システム管理
武居総子	5016	ftakei@shinshu-u.ac.jp	図書購入／目録(図書) 資産管理
清水幸直	5015		備付機器等保守

\* 図書館の利用案内、資料の所蔵確認、各種データベースの検索方法などについては、係員全員が担当しますので、お気軽にお尋ねください。

\* 人事異動により、繊維学部図書館のためにご尽力いただきました渡辺係員が、医学部図書館へ転出されました。4月からは新たに 1 名のスタッフを迎え、より一層のサービス向上に努めてまいりますので、今後ともよろしく願いいたします。



4/17	附属図書館館長会議(臨時)	[SUNS]	出席者－高須館長
4/24	図書委員会(第1回)		
6/26	附属図書館館長会議(第1回)		出席者－高須館長 [附属図書館会議室]
7/12	図書委員会(第2回)		
10/3	附属図書館館長会議(第2回)	[SUNS]	出席者－高須館長
10/6	全学図書関係主査会議(第1回)		出席者－内海主査 [附属図書館会議室]

## 編集後記

今回は新館長の高須先生に図書館の役割についてご寄稿頂きました。今後とも高須先生には時折、この Library にご寄稿頂ける事を期待しております。

また、今回も太田先生より興味深い随筆をお寄せ頂きました。太田先生、お忙しい中いつもありがとうございます。この他にも太田先生からお預かりしている随筆がございますので、ぜひ、次回掲載したいと思います。

4月からは新スタッフを加え、より一層のサービス充実に努める所存ですので、よろしくお願い申し上げます。

利用者の皆様の声も Library に掲載したいと思いますので、ご意見・書評など何でもお寄せください。係員に直接、または E-mail での寄稿もお待ちしております。E-mail アドレスは以下のとおりです。

[jfg0100@shinshu-u.ac.jp](mailto:jfg0100@shinshu-u.ac.jp)